特定非営利活動法人
サヘルの森　機関誌

サヘル

SAHEL
No.93　2013. 12

やっているうちに道は見えてくる！

小島 通雅

はじめに

1988 年、北の砂漠の中、遊牧民地帯で植林活動を始める。治安状況の悪化もあって次第に活動の重点が南に移る。南は雨期と乾期があるが、農民の定住地帯。四半世紀の植林活動の中で最も苦労したのは、自然条件の厳しさや技術的な難しさではなかった。最も手こずったのは人々の援助依存症。相手から見れば我々は援助機関の一つ、それにぶら下がろうとするのは当然のことかもしれない。若い連中が南の農村地帯へ踏み込んだのは 1993 年、本隊が北を離れて南の農村地帯で動き出したのは 2003 年頃か…。サヘルの森ではその頃既に人を雇用して木を植えることをやめていた。したがって苗を配って植えてもらう訳だが、どう村へアプローチするか。正面から入っていけば、「…の援助を」「…が欲しい」という話になる。

最初に試みたのは、その地域を良く知るローカルＮＧＯとの共同でフィールドワークショップを開くことだった。幾つかの村で植え方を説明し、集まった村人に苗を配る方法。ワークショップとしては上手くいくが、今度はローカルＮＧＯにぶら下がられる。ワークショップをやった村へはその後も自由に行けるが、新しい村へはなかなか入れない。そうこうするうちに日本人スタッフが、別の地域であったが、畑で働いている村人に声をかけて直接に配ってしまうという方法を考える。ここの所に、現在もやっている個人ベースでの苗木配布方式の第一歩があった。

畑で働いている村人がいれば一人でも二人でも苗を配る、村外れの風通しの良い所で脱穀している女性 3､4 人を見掛ければ次の村へ行く道を聞いて御礼にと苗を渡す。そのうち、彼らの家を聞いて以前に渡した苗の活着、生育を見に行きながらもう少したくさん配るといったように村へ入り込む「裏ワザ」をマスター。いろいろな村に自由に出入りできるようになり多くの村を廻るうちに、サヘル地域で行われている農業は我々の知っている農業の概念とは別の捉え方が必要かもしれないと考えるようになった。

サヘル地域の農村を知る

長い乾期があって、降水量が少なくしかも不安定な雨期、こうしたサヘル地域の農村では雨期に畑に作る単年生の農作物だけではその生活は成り立たない。畑の中に立っている樹木はそこの環境を守る意味もあるがそれだけではなく、畑に作られている永年作物なのではないか。これからの収穫を加えて、人も家畜も何とか定住生活を送ってこられたのだ。食用の油、葉、乾果のなるカリテ、バオバブ、バラニテス、ズィズィフィス、タマリンド、ネレなど、美味しい果実のなるマンゴ、パパイヤ、グアバ、スンスンなど、家畜飼料の実がなるアルビダ、セネガル、ニロティカ、ピロスティグマ、アフリカーナなど挙げればきりがない。地域によって樹種の組み合わせは若干ずつ違うものの、かつてはこうした永年作物と呼べるものが全ての畑（河岸の氾濫原のような所を除いて）に立っていたと思われる。採集して自家消費、ローカル市場から都市の市場に行くものもある。

これらの収穫物の大半は個人の畑に立つ樹木に由来するものであることを記憶に留めて欲しい。村の自給自足的生活が長きに渡り続いてこられたのは、樹木から大きな恩恵を受けていたもう一つの場所、里山の樹林がある。

集落によって違いはあるものの、個人の利用権が決まっているわけではない共有地か。集落外れや岩山沿いにあり、ここから薪炭材や住宅・作業小屋の構造材、家畜囲いなどに使う大小の資材を得ている。これらが継続的に供給されていたから村の生活は成立して行ったのだ。この里山林地は、農家で少なくとも数頭ずつ飼われているウシやたくさんのヤギ、ヒツジの重要な餌場でもある。皆さんはこれらの家畜は草を食べて生きているとお考えかもしれないが、年間を通して見れば草以上にここの低木の新芽、緑葉、緑枝を食べて生きているのである。さらにこうした家畜が人間の消化の出来ない草木のセルロースを人間の食べられる肉やミルクに変えて自家消費やローカル市場の売買分として農民の生活を支えている。里山の存在が農村生活が続いていく上で必須の条件であることがお分かりいただけただろうか。

配布方式もいよいよ本番へ

最初は村の「…の援助を」「…が欲しい」の声をかわして、村で実際に木の苗を植えてくれる人を上手く掴まえるための便法として始めていた個人ベースの配布方式であった。しかし前節でみたように農民は雨期の穀物栽培だけでなく年間を通した各種樹木栽培に畑を使って何とか生きている。近時とみに減ってきたそうした樹木を植えるのは、一家で協力すれば何とかなる事で個人の責任、努力である。とすれば、個人ベースの配布方式は便法なんかではない。重要な役を担う正道だ、頑張らねば！

また、広域の村へ苗を運び配る運搬上の都合から地域苗畑を見つけ育てていたが、苗畑の主人にも新しい役割を担ってもらおうとの思いが浮かぶ。地域で苗木を作っている者も苗木商として生きているわけではない。他の村人と同じように畑で穀類を作り収穫し、立っている樹木から種々収穫して家族を養っている村人であり、より生活の充実、安定化を図ろうと庭先や畑の一部で苗を作っている先駆的村人なのだ。事実、普通の人は家畜舎の踏込みをただ畑に運んでまくだけだが、彼等は庭先に堆肥の積込み―切返し場を工夫するとか、池を作って養魚をしてみる、乾燥に強いズィズィフィス等で果樹園を始めるとか、様々工夫を重ねて生きている人達。もちろん、庭先だとか畑に数多くの立派な木々を育てている者が多い。相撲で言えば幕内上位の力士に相当する連中、中には彼らを束ねる親方のような老人もいる。我々から苗を貰って初めて植える連中は入門したばかりの者、ほんの一寸の間相撲研修所で指導は受けるものの、稽古は同じ釜の飯を食って一緒に汗水流してするもの、それで幕下、十両と上がっていけば良いのだ。

稽古の仕方は部屋（村）によって違うだろうし、他所の部屋（村）に出稽古に行く者もいよう。連合稽古（地域苗畑の主人連中を集めたワークショップ）、地方巡業（見学会等）も考えられる。我々の役割はさしずめ呼び出しや行司、あるいは地方を廻って有望な少年を見つけたり、地方で相撲教室のようなイベントをしたりといったところ。我々は多くの村を間断的にしか訪れていない。これは始めに触れた援助依存症との関係がある。時々訪れ苗木を配り、以前に植えた若木の生長を持ち主と共に喜ぶ。それで良いのだ。木を育てるには、技術より愛情や意欲の方が重要だ。愛情や意欲は教えたり習ったりするものではない。自らが心に感じ抱くものだ。

次なるチャレンジは里山（共用林）

サヘル地域で農村が農村であり続けられるのは、①村の個人所有地の樹木が復活すること、②里山（共用林）が再生すること、③①②の条件を満たした村々でローカルな地域市場圏が保たれることの三つの条件がそろう必要があると思われる。前節で①について触れたので、ここでは②について少し考えてみるが、これはなかなかの難物である。まず里山が里山として利用されつつ維持されるには大面積が必要なこと。村の大きさや里山の生育条件にもよるが、数百ヘクタールのオーダーだろう。したがって既存の里山―ほとんどが劣化して疎林、種子を実らせるような成木がほとんど残っていない―を再生させることを

考えるしかない。そうした劣化した疎林でも必要面積の数倍あれば数年間の禁伐保護等で何とか樹勢の回復を図るという方策も考えられるが、そうした村は稀。しかしこうした利用規制に村全体で上手く乗り出しているやに聞く所もある。そこまで面積的余裕のない所ではどうするのか。

ある程度の部分的規制―たとえば幾つかのブロックに分けて交互にあるいは樹種や太さで選木的グループ分けして―の手段を講じて再生を図る。と同時に補植とか既存樹木の生育促進を図ることが絶対に必要だ。それには土壌水分条件の改善がまず第一に考えられるが、雨期の降雨を林外へ流出させない、空気中に蒸発させないでなるべく早く地下へ浸透させる、これだろう。現在も試験的に新しく植えた苗木の根元や既存樹木の根株の周辺へ盛土や置石などをして降雨の地表水を素早く吸収して徐々に地下へ浸透させるべく工夫を試みている。

また地上に盛り上がったシロアリの塚に注目して、この傍らに木を植えてみている。塚はシロアリが地下深くに穴を掘りながら地上に持ち出し積み上げたもの。地下にできた穴に降雨の水分を溜め、それを使って年間を通して水分状態をうまくコントロールしながら小さいキノコを栽培して生息しているようだ。両試験とも思いの外生育が良い。さらに様々な工夫を重ねそれを里山全面に施す、これが次なるチャレンジである。

里山は共用林、その利用、維持には村人が一丸となって当たるということがなければどうにもならない。現在進めている個人ベースの植林活動や別に取り組んでいる学校植林などからの成果が村人の総意結集に結実すると嬉しいのだが…。

マリ人スタッフが現地活動継続中ーその後のマリは？

昨年の 3 月クーデター以降、日本人スタッフを派遣できない状況ですが、マリ人スタッフが活動を継続してくれています。

その後、マリの情勢はどうなっているのでしょうか？

新大統領誕生、新内閣発足

27 人の立候補者が立ったマリの大統領選挙、7 月 28 日に第 1 回投票が行われました。過半数を獲得した候補者がいなかったため、上位 2 名の候補者で 8 月 11 日に決選投票が行われイブラヒム・ブバカル・ケイタ氏が新大統領に選出されました。

10 月 8 日にはウマル・タタム・リ首相のもと新内閣が発足し、国民和解と早期復興に取り組んでいくことになりました。

北部ではテロ、衝突が散発

今年 1 月の仏軍他の軍事介入以降、マリ北部は実効支配していた武装勢力が追いやられ、仏軍やアフリカ諸国の平和維持軍によって治安は回復しています。現地の知人に聞くと、国内外に避難していた住民が帰還し始めているともいいます。

しかし、北部では武装勢力によるテロや軍との衝突が散発しています。また、取材に訪れていた仏ラジオ局の特派員 2 名が武装勢力に殺害されるなど、未だ平和が訪れたとは言えない状況です。

在マリ日本国大使館業務再開

今年 1 月の仏軍介入後の治安悪化を受けてフランスに避難していた在マリ日本国大使館が、マリ新大統領就任に合わせて 9 月 19 日に業務を再開しました。

このように少しずつですがマリは改善に向けて動き出しています。これから国民和解に向けた交渉など難しい問題を抱えているため、どのように推移していくか不透明です。情勢を見極めつつ、日本人派遣再開を目指して今後も活動を継続していきます。

（榎本肇）

青森県八戸市で被災した工藤さん（元現地スタッフ）からのお手紙の第２段をご紹介します。現在、工藤さんは八戸市森林組合に勤務し、海岸林の植林をお仕事とされています。

八戸からの手紙　海岸林の間伐と馬搬

工藤 義治

皆様お久しぶりです。八戸市の工藤です。

今回は私の勤務する八戸市森林組合の業務についてお話したいと思います。八戸市森林組合の組合員数は約 670 名程ですが、比較的都市型の森林組合である為に、全体的に見ると知名度がとても低かったです。例えば、木を伐りたい、薪がほしい、間伐したいと思った時にすぐ、「八戸市森林組合に電話をしてみよう。」となる事が理想的です。その為地域で知名度を高める事を考えて、積極的に新聞広告で宣伝し、地域のお祭りである三社祭りに合わせたテレビ番組 CM、ノボリの設置なども実践しました。

地元新聞に様々な活動を投稿することも行いました。一番最初は伐採現場にあったフクロウの巣を守る事を記事にしましたが、その後も機会ある事に文章を考え、記事を投稿しました。宣伝で広告を出すとお金を支払わなければなりませんが、記事を書くと無料で、大きな面積を使用するとこが出来、一時期は１か月に１回ぐらいのペースで様々な事を書きました。

種差海岸の間伐　～自然放置から管理・間伐へ～

知名度向上に最も効果があったのは、観光地での間伐を行った時でした。八戸市には種差海岸という観光地があります。昭和 12 年に 880ha が国の名勝に指定されました。指定理由の要件を拾うと「岩、砂浜、芝草原、花々、ウミネコ」の織り成す風致景観が優秀で、動植物の生育場所としても学術的価値が高いことが、種差海岸の名勝としての価値といえます。高山植物が海岸線に生え、変化にとんだ遊歩道の散策はとてもお勧めできるスポットです。今年５月には「三陸復興国立公園」にも編入されました。

種差海岸のクロマツ林の間伐

この種差海岸ですが、指定時にほとんど存在しなかったクロマツは防砂、防風、防潮のため植林されました。この植栽したクロマツから種子が飛び、自然増殖して高範囲に拡大しました。また、この時期に馬や牛の放牧も減少し、マツが繁殖しやすい環境が整うこととなりました。当時は古い自然保護の考えにより、「自然を保護するには放置することが重要である。」と考えられていたためです。結果、クロマツは手入れされる事もなく、細く、密に生え、見通しが悪くなり林の中は暗くなりました。本来の指定で重要な存在であった岩は見えなくなり、砂浜の面積は減り、芝の草原や珍しい草花の生える範囲が減少してしまいました。

平成 20 年冬、八戸市森林組合では所有者の意向により間伐を依頼され着手する事になりました。八戸市、環境保護者、所有者等様々な方面からの意見を聞き、様々な意見を取りまとめて間伐作業に着手しました。

間伐で林の中に光が差し込む事によって、減少傾向にあったコハマギク、ミチノクヤマタバコなどの植物が再び見られるようになりました。さらに、県道や JR の線路の危険木の伐採も進めて、景観の改善に寄与しました。平成 21 年には今まで県道から見えなかった、葦毛崎に立つ鮫角灯台の姿が現れ、種差小学校前の馬立岩も見えるようになり、昔を知るお年寄りからは喜ばれています。

馬搬を試す　～伝統技術の復活・活用～

昨年の春に縁があって、馬で木を搬出する馬搬作業を見に行くことが出来ました。八戸でも 15 年前まで、馬で木を出していた方の話は良く聞きましたし、機械ではなく馬で木を出して欲しいと山主さんから依頼されることもありました。南部藩は馬の振興に力をいれておりましたので、騎馬打球（和製ポロ）が伝統的に残っておりますし、昔、畑を耕すのに買っていた山主さんの話は良く聞きます。また、最近は少なくなりましたが、競馬用の馬も良く目にします。オーストリアの林業関係の映像を見ると時々馬搬の映像が見られます。イギリスで馬搬の大会に参加した知人の話では、イギリスでは比較的馬で木を出すことはメジャーだそうです。しかし、現状では馬搬をしているのは 6 人程度だそうです。馬搬の良い所は作業道をあまり開設しなくても木を出せるところにあります。一日 10 ㎥以上は丸太を搬出するそうなので、100m以内であれば機械を使うのと大差は無いようです。今の林業政策で作業道の開設は重要ですが、馬で木を出せばそのようなお金は必要ありませんし、林内の土壌や木を傷つけることは減ります。将来、林業機械関係の補助金が無くなった時のことを考えると、馬搬の技術が途絶えることは非常に危険だと考えています。そんな事を妄想しているうちに、馬は非常に魅力的だと思い、1 年前にポニーを飼うことにしました。まだペットの範疇ですが、馬搬の訓練をしに、専門家の所へ通っております。今後、どのタイミングで馬搬が出来るか分かりませんが、馬のいる風景や馬と人との関わり合いはとても面白いので進めてみたいと思っております。

馬を使って材木を搬出する「馬搬」

「環境問題は実際に行動しないと何も変わらない。」そう考えて砂漠緑化を専門に研究する大学に行ったり、その後、サヘルの森の活動に参加するようになった当時から未だに変わっていないようです。

国内活動報告（5～11 月）

＜報告会・講演＞
・9/27　「サヘル地域支援（砂漠化対処に関するコミュニティ支援）のための公開勉強会」（JICA 研究所）
＜学校との関係＞
・7/ 8　女子学院牛乳パック回収
＜イベント＞
・5/11～12　みどりとふれあうフェスティバル 2013（日比谷公園）
・10/5～6　グローバルフェスタ 2013（日比谷公園）
・10/ 27　みなこいワールドフェスタ 2013（長野県駒ヶ根市）
・11/2～3　ジャパン・バード・フェスティバル 2013（千葉県我孫子市）
＜定例活動＞
・5/18　昭和薬科大ーかしのき山
・6/16　消防博物館と新宿歴史博物
・7/ 20　日比谷公園、東京駅
・8/24～25　サヘルキャンプ
（栃木県鹿沼～足尾）
・9/21　池上本門寺、大田区郷土博物館
・10/19　サザエさん博物館、駒沢公園
・11/16　大学通りの並木と谷保天満宮

■牛乳パック回収

7 月 8 日に東京都千代田区の女子学院中学校・高等学校で牛乳パックの回収を行いました。ありがたいことに生徒さんが数年間かけて集めて下さったとのこと。山田洋治商店さんに売却したお金は、現地活動に使わせていただきます。　（榎本肇）

回収量 330kg：売却金額 2,970 円

■みどりとふれあうフェスティバル

5 月 11 日（土）、12 日（日）に日比谷公園（東京都千代田区）で「みどりとふれあうフェスティバル 2013」が催されました。スタッフ始め、多くの会員さんにお手伝いいただきました。11 日はあいにくの雨で来場者も少なかったですが、12 日は良く晴れ多くの来場者が訪れました。元スタッフの知人など思いがけない方にお会いしたりして、改めて世界は狭いねと皆で話しました。

「森林の市」がリニューアルされたこのイベントですが、全体の出展団体も増え、「森林の市」常連団体に加え、半数以上が新しく出展した団体でした。「みどりとふれあう」ということもあり、木や森を使って遊ぶ体験プログラムも充実していました。

海外で活動する団体も少なく、アフリカに関心を持って会場を訪れる人も多くはありませんでしたが、中には活動やバオバブの話などに興味を持って話を聞いて下さる人もいました。　（榎本肇）

■ジャパン・バード・フェスティバル

11 月 2 日（土）、3 日（日）に手賀沼湖畔（千葉県我孫子市）で開催された「ジャパン・バード・フェスティバル 2013」に出展しました。鳥の巣や羽根が展示のメインでしたが、他にも鳥をモチーフにした西アフリカの織物や仮面、バオバブの実、タウデニの岩塩など現地のものを展示して西アフリカとマリの紹介をしました。（高津佳史）

■難民映画祭

去年 3 月のクーデター、さらには今年 1 月のフランス軍介入以降、残念ながら私たちがマリについてテレビで目にするのは戦闘場面がほとんどとなってしまいました。そんな中、10 月 5 日、毎年トンブクトゥ郊外で開かれてきた音楽祭を描いた映画『トンブクトゥのウッドストック』が明治大学和泉キャンパスで上映され（国連難民高等弁務官事務所主催）、100 人を越える人が集まりました。

この映画は砂漠に暮らす遊牧民トゥアレグの文化的アイデンティティの拠り所と呼ばれる音楽祭の様子をミュージシャンや主催者の思いを伝えると共にトンブクトゥの町や人々の生活風景も詩情豊かに描いており、見た人の抱くマリのイメージに影響を与えたはずです。上映後にはトゥアレグ女性の青木ラファマトゥさんがゲスト出演したトークショーがありました。彼女とサヘルの森の出会いはティンナイシャ村で活動を始めた 1988 年にさかのぼり、1993 年に来日後は力強いサポーターです。日本語が達者なこともあって来場者からたくさんの質問が出ました。　（森律子）

■定例活動報告（11 月）

現場を見る目を養い、会員の交流、自然への親しみと理解等を目的として、毎月 1 回、都内などのあちこちに出没しています。

11 月 19 日(土)は JR 中央線の国立駅に 10:30 集合。国立駅は中央線の高架事業で三角屋根の駅舎がなくなり、工事中でした。今日の参加者は 4 名。だいぶ寒くなってきましたが、快晴の天候に恵まれました。今日のコースは、国立南口の 50m道路、一橋大学構内、江戸街道、くちたち郷土文化館、谷保天満宮を巡りました。

50m道路には幅の広い緑地帯に 70 年生を越えるイチョウとサクラ並木があり、ちょうど紅葉が始まっていました。今年は暖かさが続いた後、急に冷え込んだためか、サクラの紅葉が鮮やかです。

【70 年生のサクラ並木】

一橋大学はゆったりした空間に大きく生育する樹木群と古い伝統ある重厚な建物が印象的です。兼松講堂や時計台のある図書館の柱や外壁にはいろいろな装飾が施されています。

池の脇で昼食。カルガモやカメが動き回っていました。

【一橋大学 兼松講堂】

次は江戸街道。甲州街道に並行した裏街道。低層の住宅街の間に 3mあまりの細い道が折れ曲がりながら続いており、庚申塚もありました。

南に向かって、南武線を横断し、くにたち郷土文化館へ。古くからの遺跡や生活、祭り、開発の歴史などの展示がたくさんありました。国立駅周辺は文教地区指定の市民運動があり、良好な環境が保たれた経緯が見られました。

【きれいな湧水の流れ】

近くの小川は、台地からの湧水で水がきれい。昔から生活しやすい場所だったようです。 近くには古民家を移築した展示館、東京都歴史環境保全地域の緑地もあり、水田もあります。

水田、畑、果樹園のある細い道をうねうねとたどると谷保天満宮。東日本最古の天満宮で、大きな樹木に囲まれています。梅園もありました。そして、近くの南武線谷保駅で 16 時前に解散。大きく生育した樹木群やいろいろな暮らし、歴史が感じられる散策でした。 （坂場光雄）

■サヘルキャンプ報告(8 月)

8 月 24 日・25 日、11 名（男性 7 名、女性 4 名）が参加してサヘルキャンプが行なわれました。場所は栃木県、大谷石地下採掘場跡や旧足尾銅山を訪ねました。

浅草から乗った電車が新鹿沼駅に近づくにつれて大谷石を使った蔵や塀が田んぼの中に見え始めました。採掘場跡はそれまでにもテレビで見たことがありましたが想像していた以上に広い空間でした。気温は約 10 度、しばし暑さを忘れました。

2 日目に訪れた旧足尾銅山は伐採や煙害ではげ山になった場所の植林がなかなか進んでいないと聞いていましたが、さもありなん、山は大変急峻で表土を失っています。それよりも強い衝撃を受けたのは足尾環境学習センターで聞いた堆積場（鉱石くずなどの廃棄場所で有害物質を含む）の話でした。

【環境学習センター】

今も地域に 14 カ所あり、東日本大震災ではそのうちの 1 カ所から土砂が流出して渡良瀬川が汚染されたそうです。福島原発を思い起こさせる怖い話で、足尾鉱毒事件は現在の我々の問題でもあると感じました。

（森律子）

【緑が復活し始めた足尾の山】

イベント案内

■定例活動■

毎月第 3 土曜日に行っています。お気軽にご参加ください。なお、詳しくは電話（留守電を残して）、メールにて事務局までお問い合わせください。

・12/21　多摩丘陵の冬の雑木林を楽しむ
（長沼公園、平山城址公園）
京王線・長沼駅改札 10:30 集合
・1/18　江戸で最も古い七福神と上野の森
（谷中七福神と上野公園）
JR 山手線・田端駅北口改札 10:30 集合
・2/15　室町時代からの古寺と明治初めに指定された公園
（増上寺、芝公園、放送博物館）
JR 山手線・浜松町駅北口改札 10:30 集合

■まちカフェ■

町田市で活躍する NPO・地域活動団体が、市民向けの企画・ワークショップ・物販・ステージ上での出し物などを持ち寄って開かれる「お祭り」です。

町田市に事務局を置くサヘルの森も活動展示と物販で参加します。皆さまのご来場をお待ちしております。

期日：2014 年 1 月 19 日（日）9:30～17:00
会場：町田市役所
（東京都町田市森野 2-2-22　小田急線町田駅・JR 横浜線町田駅から徒歩 8～11 分）

前回のサヘルブースの様子（2013 年 1 月）

【アフリカ関係書籍紹介】

「西欧民主主義破れたり！」という帯の文句が印象的な**『謎の独立国家ソマリランド』（本の雑誌社）**をご紹介します。早大探検部出身の高野秀行氏の著書です。舞台のソマリアは海賊が跋扈し内戦と無政府状態が続く地域とされています。その中にあって十数年平和を保つソマリランドの謎を追ったルポです。氏族の利益が第一とか、一度内側に入れば外人でも同族扱いとかマリでも「あるある」という記述に思わず苦笑してしまいます。

クリスマス募金のお願い

年末恒例のクリスマス募金にご協力をお願いいたします。ツリーにはサヘル地域の安定化への願いを込めたいと思います。

振込用紙を同封させていただきました。また、本年度会費がまだの方は、納入下さいますようお願いいたします。

会費納入にご協力ください

NPO 法人『サヘルの森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

・一般会員　年 5,000 円
・維持会員　年 20,000 円

特定非営利活動法人　サヘルの森
住所：〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3
アーベイン平本 403　㈱エコプラン内
TEL：042-721-1601（留守電対応）
FAX：042-721-1704
郵便振替口座：00170-6-115054

HP：<http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/>
E-mail：sahel-no-mori@jca.apc.org

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

機関誌『サヘル』No.93　2013 年 12 月 10 日発行
発行人：坂場光雄　／編集：高津佳史

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊